

## 「香港中文大学サマープログラム参加報告書」

京都大学薬学部 1年 長谷部 依央

今年の香港中文大学サマープログラムでは、8月3日から8月25日の約3週間香港に滞在した。平日は毎日9時のバスに乗り、山のふもとにある建物で授業を受ける。午前は文法の授業3時間受講し、昼食は近くの食堂で済ませ、図書館で宿題を終わらせてから2時間後に午後のスピーキングとリスニングの授業をまた3時間を受ける。放課後は大学周辺へ電車であけて買い物をしたり、ごはんを食べに行ったり、寮で卓球をして過ごした。文法の授業では、1つ1つ学習した単語用いて例文を作る練習をした。リスニングとスピーキングではテキストに記載されている文章を先生が場面ごとにイラストを描き、最終的にはイラストだけでストーリーを自分で代言する。また、ヘッドホンを着用し、先生が任意で選ぶパートナーと接続させてスピーキングや会話の練習もした。授業で定期的に実施されるリスニングテストでは会話のスピードが速くて、初めこそ聞き取れなかったが、だんだんと理解できるようになっていったのは感動的であった。授業は英語と中国語で行われた。中国語で読み、書き、聞く機会がとて多かったので語学力がぐんぐん伸びた。さらに、定期的に習った単語同士を使って例文を作るトレーニングをすることで膨大な量の単語もすべて関連付けられ、語彙数も飛躍的に増加した。さらに、スピーキングテストでは先生が個人個人にフィードバックをするという手厚い指導を受けた。

授業だけでなく、現地の学生と交流する機会も設けられた。香港中文大学歴史学科の学生との交流会で印象的だったのは、彼らが故郷である香港について深い理解をもっていたことだ。地形、気候、歴史的背景をふまえたうえでの自身の見解をすらすらと述べる姿をみて感銘をうけた。反対に日本はどんな国か、日本についてどう思うかといった漠然とした問に対して私のはっきりとした見解を持っていないことに気付かされた。国際交流の場に備えてこれまで京都の伝統工芸品について調べたり日本の文化を紹介する発表や資料は作成したりしたことはある。しかし、彼らを見て、国際交流をする際にはそのような情報の羅列だけでなく、それらを踏まえた上での、自分の自国に対する評価を提示することが求められると知った。自分の見解を交流しあって初めてお互いの国について理解しあえるのだと感じた。

今回の留学で中国語が飛躍的に上達したことは言うまでもなく、物事を計画して一人で実行してみるなど、自立への一歩を踏み出す経験ができた。例えば、最終日にはガイドブックを片手に1人で市内へ出かけ、町で会う人々に道を聞きながら複数の店やレストランを回ることができた。新鮮だったのは、言語が通じないということだ。私はアメリカに滞在していたこともあり、英語は得意だった。しかし、地元のレストランなどに行くと、英語も通じない上に香港では標準語とは全く発音が異なる広東語が一般的であるため、学習した中国語も使えない。そのような中、初めて身振り手振りでなんとかコミュニケーションをとるということを体験した。さらに、これまでは海外で生活していた時も親が航空券から搭乗から生活費からすべて工面していた。高校のときの海外研修も先生が引率してくださり、食費も食べに行く場所もすべて決まっていた。しかし、当然だが今回は引率の先生は存在せず、放課後の時間の使い方は個人に任される。その時に今までお膳立てされていており、いかに恵まれていたのかということに改めて痛感した。責任を持ったひとりの人間になるために必要なことは何かということに少し経験したように思う。

今回は同じ大学から来た仲間が9人と比較的多く、また、とてもよい仲間に恵まれたので、滞在中

はいろいろと助けてもらうことが多かった。しかし、香港滞在期間で多くを学び私は一回り大きくなることができたと思う。そこで、今度は今回のような仲間がいなくてもひとりでなんとかやっていけるようになりたいと考えた。もちろんひとりというのは海外では危険なことが多いが、例えばより積極的に他国の人に交流したりしていこうと思った。今回私が受講した中国語のクラスは大半が同じ日本人だったので、次回はヨーロッパなどに留学するなどして、より国際的な交流ができればと考える。